

令和六年六月号

《第二三八号》

しるへび

宗教法人岩國白蛇神社

〒740-0017

今津町六丁目4-2

☎ 30-3333

水無月の祭典・行事案内

【月次祭】 九時半

十月

二十二日（土）

【夏越の大祓】

十五時より

※ 事前に「人形」を配布します。



【昭和天皇御製】（第一二四代）

「海上日出」

つはものは舟にとりでにをろがまむ
大海のはらに日は昇るなり

（昭和十九年）

【お願い】

六月十三日から十五日（土）の
三日間は拝殿天井画への加筆作
業の為、御祈祷の予約はできま
せんので、お知らせ致します。

【第十四回神社総代会】



五月十一日
（土）十時より
当社の社務所
二階にて、来
賓の森橋崇敬
会会長をお招
きして、十名
の総代と第十
四回神社総代
会を開催致し
ました。
新職員の紹
介を兼ねた宮
司の挨拶と森
橋会長にご挨
拶を頂き、報

告と議事に入りました。

令和五年度の祭典行事の報告と今年度の計画
について説明があり、同じく決算報告が行は
れました。守川総代長から監査報告と続き、
今年度の予算案について報告されました。
そして、来年の巳年の初詣対策について協
議され、特に駐車場の問題が話し合われまし
た。具体的な案も提示され、八月の大掃除の
後に、第一回の対策会議が開催されることな
どが決定しました。

【推薦図書】

『赤と青のガウン』

PHP文庫

～オックスフォード留学記～

彬子女王 千二百円＋税

「・・・この留学記には、彬子女王という
人間の人生の記録として、楽しかったこと

も辛かったこともすべて正直に書き綴って
きたつもりである。これが、私の留学生活
を温かく見守ってくださったすべての方た
ちへの、私からの感謝の気持ちを込めた『最
終報告書』である。（本書「不撓不屈」より）



三笠宮家の彬子女王殿下のこの留学記を
一気に読み終わることができたのは、その
文章の読みやすさでした。よどみなく綴ら
れる中に清らかさを感じたのはやはり皇族
の一員であることにあるのであろうか。是
非とも購入して貰いたい文庫本です。

『日本文明の真実』

ビジネス社

～歴史の大ウソを打破する～

武田邦彦著 一六五〇円

「・・・日本復活のヒントは歴史にあります。
もつというと世界でも優れた技術の歴史に
あり、今の日本人もその歴史を継承してい
るという事実です。『知られざる技術』の
歴史をひもとくとき、日本人が自信を取り戻す
ことが肝要なのです。世に流布した『歴史
の大ウソ』に欺かれてはなりません。・・・」
（はじめに「歴史の大ウソ」を打破する日本の技
術）から

《目次》

- 第1章 技術で世界をリードした日本の旧石器・縄文時代
- 第2章 日本侵略を防いだ奈良時代から受け継がれた匠の力
- 第3章 世界最先端だった江戸の翻訳文化が示す平等社会
- 第4章 日本一国が「近代化」に成功した理由



- 第5章 挫折した3つの「夢の技術」
- 第6章 直ちに中止すべきさんねんな技術
- 第7章 日本の発展を阻む「科学の敵」

気ままに『古事記』中巻 (五十七)

かむやまといはれびこのみこと
神倭伊波礼毘古命(神武天皇)の東征

く賀須泥毘古(長髓彦)との戦ひ

そこからさらに上つて、浪速の渡りを経て、星雲の白肩津に船を泊められました。この時に、登美能那賀須泥毘古といふ者が兵を率いて戦ひを挑んできました。

神倭伊波礼毘古命はこれを迎へ撃つため、積んであつた楯を取り出し船から下りました。それでこの地を楯津といふ名を付けられました。今は日下の蓼津と呼んでゐます。

那賀須泥毘古を相手に戦つてゐるときに、五瀬命が敵の放つた矢を手に受けて深い傷を負つてしまひました。そのときに言はれたのは、「私はこの神の子であるのに、太陽に向かつて戦つてしまつたのがいけなかつた。だからあんな奴に傷を負はされたしまつたのだ。これからはぐるつと回り、太陽を背にして戦ふことにしよう」と。

それで、南の方から迂回して進み、あるところでは手の血を洗つたので、そこを血沼海といふ地名になりました。さらに巡つて、紀国のある場所です。「ああ、あのやうなつまらぬ奴の手にかかり私は死ぬのか」と大声で嘆かれ、亡くなつてしまはれました。この雄叫びの故に、ここを男之水門と呼ばれることになりました。五瀬命の墓は紀国の亀山にあります。

(続く)



『昭和天皇と岩国』(三)

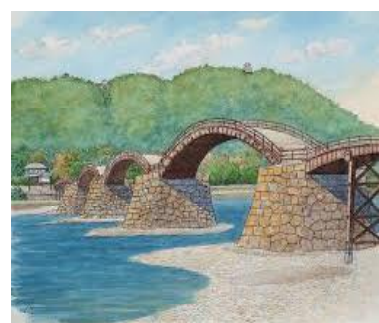
昭和二十二年十二月五日

昭和天皇は、藤生の国立岩国病院から岩国興業組合に向かはれる市内巡幸において、名勝岩国の錦帯橋を御覧になりました。これは二度目の光栄に浴したことになります。一度目は皇太子殿下の時で、大正十五年五月二十八日でありました。この時のことについては次回に再度記したいと思ひます。

陛下は五日間にわたる長い御日程にて山口県下を御巡幸され、百五十万県民は御慈愛に

あふれる陛下を目の当たりに仰ぎ感激をもつて祖国再建に奮起したこととせう。

十二月五日に広島県へ向かはれる陛下をお見送りした当時の田中龍夫県知事はその感激を次の通り語つてゐます。



『陛下のご巡幸も今日滞りなく終りました、陛下に対する気持ちは矢張り血のつながりの日本人だつたといふことである、引揚者、戦災者、遺家族にしても国家の象徴である陛下を迎へる気持ちは日本人にしてはじめて持ち得る気持だつたと思ふ。私は涙が出てだうにもならなかつた、泣くまいとしても涙が出るのであつた、百五十万県民も同じやうな気持にひたつたことであらう。そして、御巡幸の御真意を体して日本の再建に苦しみ堪えて真剣に努力しなければならぬと心に誓つたであらう。山口県は四泊五日の長い間一日もお休みなく然もお風邪気味であるにも拘はらず各方面にわたり御視察、御激励下され、つつがなく御日程を終へられたことは本当に嬉しく思つてをります。』

(続く)

【十日から形代を配布します】

六月三十日の大祓は、わが国の古代より続けられてゐる伝統行事です。十日の月次祭より「人形」を配布します。氏名と生年月日を記入して、三十日の当日か事前に社務所にご持参ください。一家族千円程度の初穂料をお願いいたします。「人形」を持参された方には茅の輪を授与します。